



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田
信の白浜だより(その47)

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その47). うみひろも 2013, 121: 13-14

ISSUE DATE:

2013-06-16

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180269>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その47)】

京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”のスナガニたち

毎年、夏から秋にかけての京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”の砂浜には、直径1 cmほどの丸い穴があちこちに開いている。スナガニ類の巣穴である。スナガニ類の体色は砂とそっくりで、移動スピードも時速8kmと素早いので、発見が難しい。地面に写った影でその存在がわかる、まるで忍者のようなスナガニ類は、英語でゴーストクラブと呼ばれている。

南方系のスナガニ類は、甲幅が3cmあまりになる中形のカニで、わが国では、稀な種も含めて4種が知られている。最も北まで分布しているのがスナガニで、東北地方まで知られる。北浜では、少なくとも20年ほど前から存在しているのが著者によって確認されている。

北浜で数種のスナガニ類を確認

1999年夏、これまでにないほど多くのスナガニ類の巣穴を発見した。442もあった。地球温暖化とともにますますその数が増加するだろうと継続調査した。予想に反して巣穴数は減少して100を下回り、2004年はわずか33しか見つけられなかった。しかし、昨今は増えているようだ。現に2013年6月13日、今年初めて無数のちっちゃな巣穴があいていた。これらの巣穴は突然その日に出現し、まさに大量発生・大量出現である。おりからの季節外れの台風3号の接近の影響を疑いたいほどである。

2004年10月15日、北浜でスナガニ類の死んだ雌を発見した。自然死と推察され、数年前に見つけた雌の個体に続く2個体目だった。2個体とも一切傷はなく、肉も腐ってはいなかった。冬季には大型個体は人知れず大量死しているのだろう。これらどちらの個体も、以前から生息している普通種のスナガニと推定していた。しかし、奈良女子大学の和田恵次先生に標本を見ていただいた結果、南方系のツノメガニであるとの訂正をいただいた(図)。

和田先生の研究グループは、スナガニ類の分布調査を全国で実施されており、北浜の個体群も2003年に調査されていた。その結果、かつて生息していたスナガニに置き換わり、ツノメガニばかりになっているのご教示をいただいた。ツノメガニは、かつては奄美大島以南にしか分布しないとされていた南方系種だったが、最近の和田先生の研究調査で相模湾や紀伊半島から未成熟個体が記録されているとのことだ。さらに、北浜では、潮の影響を受けない浜の最上部には、南方系のナンヨウスナガニが2003年の調査で発見できたこともご教示くださった。

スナガニ類には他のカニにあまりみられないいくつかの特徴がある。雄だけでなく雌の左右のハサミ脚も大きさが違っている。大きいハサミ脚は、餌取りや巣穴掘りにはあまり使用しない。小さいハサミでもっぱら砂をすくって口に運び、中に含まれている有機物を食べる。食べた後は砂団子として残す。そのかわり、雄の大きいハサミ脚は発音器官になっている。脚の内側にある多数の突起と根元部分（まさつ片）とすり合わせることで、「シュルシュル」と音を出す。鼓膜があって、音を聞くことができるので、交尾や威嚇などに関連している。音を出すカニ類は少ないので貴重な存在であろう。

図. 京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”の波打ち際で死亡していたツノメガニの雌（2004年10月15日）

